

---

# 原爆の記憶

---

## ～長崎市における碑データベースの構築と空間の解釈～

---

中村美貴子

### 1. はじめに

1945年8月9日午前11時2分、長崎の街に一発の原子爆弾が投下された。猛烈な爆風、熱線、放射線により多くの人々が犠牲となり、町は壊滅的な被害を受けた。長崎ではこの原爆の体験を後世に残すため、また原爆で犠牲になった人々の存在を記録するための様々な活動が行われてきた。「永続的記憶装置」としての碑（いしぶみ）の建立活動は、そうした取り組みの一つである。

近年、歴史学では記念碑などの碑の、貴重な非文献資料としての学問的な意義が理解されるようになってきた。記念碑は過去の出来事の記録装置でありながら、同時に政治的・文化的「伝達装置」であり（王2006：245）また記念碑そのものの分析を通じて、ある特定の歴史事象に対する人々の意識の変化、記憶の形成過程を広く読み説くことが可能となる（和田2005：115）。戦争記念碑を分析対象とした研究としては羽賀（1998）による戦没者の慰霊と、戦争における兵士の死という問題を解明しようとしたものがある。

ベトナム戦争記念碑の象徴性を分析したマリタ・スターケン「正当化された歴史記述と私的な記憶のはざまにあって、絶えず変化する様々な歴史や人々が共有する記憶を表象するのが、集合的な文化の記憶」であり、その意味で戦争記念碑は「過去の困難な体験を振り返ってそれに向かい合うという『癒し』の行為を表す象徴であっただけでなく（略）…戦争の歴史化と再歴史化にも重要な役割を果たしてきた」と述べている（スターケン1999：31）。つまり、戦争では誰がどのように記憶されるべきなのかという問題を検討するにあたって、戦争記念碑は重要な資料として注目されてきたのである。

非文献資料としての碑の記述内容、特に建立年、名称、建立者について検討することにより、当時の社会事情を推し量ることが可能である。また、碑に刻まれた碑文を検討することによって記念碑建立の意図、建立当時の戦争観、戦没者観などを考察することが可能である。

戦後60年以上が経過した今、戦争体験者の減少により人々の原爆の記憶は希薄化しているといわれる。それに伴って碑と人々の関わり方、さらには碑の持つ機能がどのように変化しているか、さらに記憶の継承方法がどう変わっているか、長崎に存在する碑を考察することで明らかにすることを本研究の目的とする。

## 2. 調査方法

本研究における長崎市の碑情報は、文献データとフィールドデータから構成されている。フィールドデータは2008年6月から10月にかけて、GPS受信機とデジタルカメラによって収集された。この調査では原爆に関連する全ての碑を網羅することを目的とし、文献情報と照らし合わせた上で一覧にまとめた<sup>1</sup>。

## 3. 長崎市北部における碑の建立状況

本研究では、研究対象とする地域を長崎市北部に限定することとした。この章では実地調査によって得た情報を資料として活用し、碑の建立状況の報告を目的とする。なお調査の際には『碑は訴える 被爆40周年記念』（長崎国際文化会館1986）、『長崎の碑 第六集』（長崎市南公民会どじょう会1997）、『「平和を祈り」学校界わいの原爆遺跡を巡る』（岩永弘2002）、『長崎の原爆遺跡・慰霊 ウォークマップ』（長崎平和推進協会2005）を参考資料とした。

### 3-1 町別建立状況

碑の建立状況を町別、名称別、年代別に検討した。平和町にある平和公園と爆心地公園は碑の建立が集中しているため、この二つと平和町はそれぞれ独立したものとして扱った。

表1. 町別建立状況

町名	碑数	町別	碑数	町別	碑数
爆心地公園	33	清水	4	緑	1
平和公園	22	竹ノ久保	3	高尾	1
坂本	19	上野	3	江戸	1
城山	15	松山	3	尾上	1
梁川	8	稲佐	3	江里	1
平和	8	桜	2	宝	1
文教	7	岩川	2	石見	1
銭座	6	川口	2	淵	1
茂里	6	浜口	2	若草	1
筑後	5	小峰	2	中	1
白鳥	4	御船蔵	2	八千代	1
宝栄	4	昭和	1	曙	1
江平	4	大手	1	住吉	1
橋口	4	家野	1	合計	199
大橋	4	本尾	1		
平野	4	油木	1		

<sup>1</sup> 筆者は199基の碑のデータを収集したが、その一覧はスペースの都合により本稿では割愛せざるを得ない。

ここで注目すべきは爆心地周辺の町における碑の建立数が多いということだ。原因は二つの条件が揃ったためであると考えられる。一つは、爆心地から近い距離であったため被害が他の地域よりも大きかったということである。

もう一つは記念碑が建立されやすい場所があったということである。安藤によると記念碑の建立に際しては、多くの人々の目に触れるような場所が選ばれ、また道路わきや寺社の境内、学校の校庭等が選ばれやすいという傾向がある（安藤2008：2）。現在、坂本には長崎大学医学部、長崎大学付属病院、城山には城山小学校、梁川には淵中学校、梁川公園、平和町には浦上天主堂、さらに文教には長崎大学や純心高校など碑が建立されやすい場所がいくつも存在する。

爆心地周辺で碑の建立数が多くなったのは、上記二つの条件が揃ったためと考えられる。建立場所に関して言えば、他の町においても、公民館横や、公園内、また人通りの多い通りに建立されているものが多く、長崎北部全域において安藤の指摘が当てはまると言えよう。

一方建立数が少ないとはいえ、爆心地から半径2キロを超える地点でも碑は建立されており、碑の建立が長崎市北部の地域社会に広く行き渡っていることが窺える。

### 3 - 2 . 名称別建立状況

長崎市北部における碑の名称は多様である。松崎が「記念碑の名称から建立した人々の戦争観・戦没者観を考察することが可能である」（松崎2001：58）と述べているように、個々の碑の名称を検討することは、碑の建立意図や碑の持つ社会的機能を知る上で有益であると考えられる。本研究ではそうした名称を整理し、表2のように12種類に分類した。

表2 . 名称別建立状況

分類	数		
祈念碑	45	忠魂碑	2
記念碑	13	詩碑	2
殉難之碑	13	歌碑	4
追悼碑	5	句碑	5
慰霊碑	22	銘板	54
供養碑	8	遺構	26
		合計	199

長崎市北部の碑で最も建立数が多かったのは銘板、次に祈念碑であった。分類方法としては、碑面に「殉難之碑」「慰霊碑」などと書いてある場合は表記されている名称に従う。しかし、碑の名称はかなり多様であるため、碑面に独自のタイトルのみが表記されている碑も多く存在する。これに関して羽賀は「記念碑には撰文を持つもの、題額のみのも、名前を刻むもの、そうでないもの、など多様性が存在するため、建立した意図を知るためには碑文を検討して見る必要がある」（羽賀1998：217）と述べており、本研究においても、碑文が刻まれている碑に関しては碑文を検討したうえで、碑文がない碑に関しては建立経緯を調べることで分類を行った。

## 4．長崎市北部における碑の機能の変遷と人々との関わり

これまでの研究では、死者を核とし、それを取り巻く環境の中で死者への行為として碑の建立や慰霊祭という営みに焦点が当てられてきた。しかし本研究においては、碑を核として捉えることによって、碑の果たす機能、さらには死者と生者を内包する人々と碑との関係性について検証していくこととする。ここではその関係性を明らかにするために、長崎市北部に分布する碑を、建立の意図、人々への影響、関係性などを踏まえて3つの機能に分類することで分析を進めた。その3つの機能とは墓的機能、メッセージ伝達機能、土地の記録的機能である。

### 4 - 1 . 墓的機能

墓的機能を持つ碑には三点の特徴が挙げられる。

まず一点目は建立対象が死者であり、建立者と建立対象がともに同じ共同体に属しているということである。今回の調査では建立者と対象者の間には原爆投下以前、あるいはその直後に何らかの関係を持ち、とりわけ同じ共同体に属していた人々同士である場合が多いということが明らかとなった。建立者は碑の向こう側に犠牲者を見ることとなり、碑を媒介としてそこでは慰霊行為が行われる。この慰霊行為はしかし、被爆体験者の減少に伴う記憶の希薄化にともなって消滅しつつあり、とりわけ自治会レベルでその消滅傾向が顕著である。

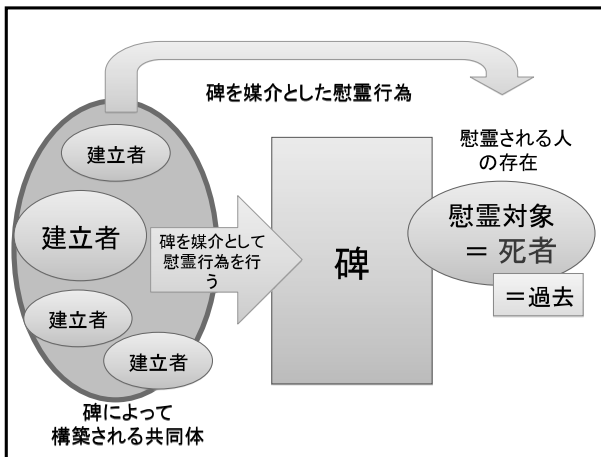


図1．墓的機能を持つ碑と人々との関わり

二点目は現在から過去へ向けられた碑であるということである。墓的機能を持つ碑の場合、未来の生者へ向けられたメッセージ性を含む碑も存在したが、本来的には生者が死者を偲んで建立したものであり、碑は生者ではなく死者に向けられたものとなる。墓的機能を持つ碑は現在(生者)から過去(死者)へ向けられていると言えるであろう。

三点目は碑を取り巻く共同体が生まれるということである。この機能を持つ

碑には、死者を集合体的枠組みの中で捉えた場合の記憶と、一個人としてとらえた場合の記憶という二つの記憶が関わる。この記憶が碑と生者との関係をつなぎとめる重要な要素になるのだが、前者の場合、建立者も集合体としての共同性を構築することが可能となる。

祀られる存在が個人であった場合は、その個人に対して慰霊を行うのは個人と関係が深かった二人称的な存在(私 - あなたと呼びあえる関係)である。一方、祀られる存在が集合体の場合、それに対する慰霊行為を行うのは集合的な主体である。その集合体は二人称的關係(あなた)から、さらに三人称的存在(かれら)にまで広げられる。「長崎原爆七高戦災学生追悼碑」を例に

取り上げよう。犠牲になった一人一人に対して慰霊行為を行うのは遺族や友人である。一方で12名の第七高等学校生の犠牲という集合体が対象になることで、慰霊行為を行う生存者も第七高等学校という共同体の枠組みに関わる全ての人々、ここでは第七高等学校同窓生という集合体的存在になるのである。このように、生存者の新たな集合体の構築が、碑の介入によって可能になると考えられる。

#### 4 - 2 . 平和メッセージ伝達機能

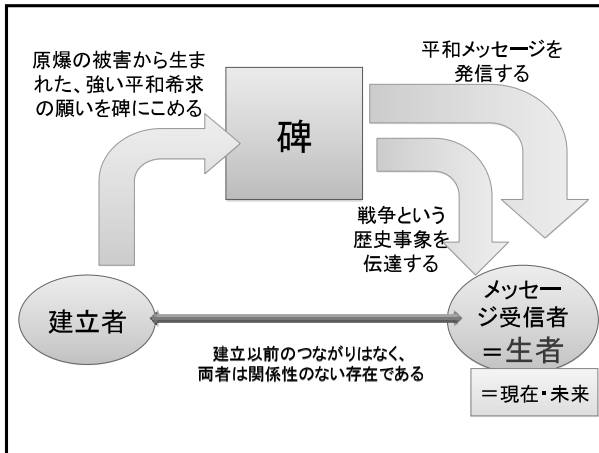


図2 . 平和メッセージ伝達機能を持つ碑と人々との関わり

この機能を持つ碑の目的は平和を祈ることにある。したがって「慰霊」は行われず、当然ながら碑を媒介とした慰霊対象者も存在しない。また、墓的機能をもつ碑のように、建立者個人にとっての原爆犠牲者との特別な過去の記憶や、特定の共同体の中での過去を想起させるものではない。

平和公園は「平和」というテーマで美しく整備され、長崎を代表する観光地にもなっている。そのような場において碑は、インパクトのある形状や碑

文、また平和公園という特殊空間における碑の集合性によって、平和メッセージをなかば強制的に発信する。そのメッセージを受けとる受信者は、遺族や戦争体験者のような戦争に対して自身の記憶を持つ限定された人々ではなく、戦争を経験していない世代から、国籍を異にする人々まで幅広く当てはまる。

この種の碑には死者への冥福を祈る碑文が多く添えられているが、その死者とは墓的機能のところで見てきたような具体的な死者ではなく、世界レベル（あるいは普遍的レベル）に及ぶ抽象的な死者である。したがって、メッセージ伝達機能を持つ碑は、死者ではなく生者に向けられたものであると言える。送り続けられる平和的メッセージは、平和な未来を想起させ、それを願う気持ちを掻き立てるものであり、そこでの生者は核兵器の廃絶や未来の平和を創造していく対象としてとらえられている。したがって、この機能を持つ碑が多く存在する平和公園は、長崎市にとって外部に対する広報活動の場であると考えられる。

一方、ここでは建立者と受信者との間に具体的な関係性もなければ、なんらかの関係が築かれることもない。また特定の死者との過去を想起させる機能を持つものではないので、碑と人をつなぎとめる関係性もないと言える。

#### 4 - 3 . 土地の記録的機能

土地の記録的機能を持つ碑として、長崎市が市内各地に設置している銘板を挙げることができる。その建立の第一の目的は、その土地に根差した説明をすることで戦争の記憶をわかりやすく

後世に伝える点にある。したがって、生存者たちの慰霊や共同体の核となるわけではなく、また、生存者間の絆を深めるものにもなり得ない。

銘板の多くは「当時の状況」「被害状況」「平和祈念」という画一化された内容から構成されるが、そうした記述の多くに爆心地からの距離が記載されていることが注目される。このことについて米山は次のように述べている。

ほとんど例外なく生存者たちの話には、何メートル、何キロメートルという厳密な形で、爆発の瞬間に爆心地からどのくらいの距離にいたかが描かれる。証言者の記憶は今でも爆心地から外側へ四方に広がり、爆心地からの距離を測る同心円が二重に焼き付けられた、都市図の視覚的なイメージによって媒介されているのである。

上からのながめは、永遠にその景観に刻み込まれ、出来事を表象しようとするその後のいかなる試みをも決定付けることになった。生き残った人々の様々な経験と主観性もまた、このまなざしによって、被爆者というアイデンティティのもとへと組み込まれ、惨劇の証言は常にこの支配的な空間表象に則って形作られてきたのである（米山2005：169）。

銘板の多くに爆心地からの距離が刻まれているという事実は、長崎市においても爆心地からの同心円という空間表象によって空間が再認識あるいは解釈され、それが原爆の被害を知るための重要な構成要素となっていることの表れであろう。爆心地からの距離によってその被害を図るといって一方で見方によって、原爆という歴史を一側面から片付けてしまうという性質を持っている可能性は否定できない。

注目される点としてはほかに、ほとんどの銘板に写真が埋め込まれているということ指摘できる。被爆当時の写真をその土地に残すということによって銘板の解説文は、見る者によりリアルな原爆の歴史を伝える強力なテキストになりうる。さらに、この被爆直後の光景を再現した当時の写真や被爆遺構と組み合わせられた説明書である銘板に出会うことで人々は歴史をさかのぼり、被爆直後の長崎の町と対面することができる。したがって、この銘板の存在は土地と最も身近でかつ、人々によりリアルな歴史を伝達することができるその土地に埋め込まれた歴史保存資料であると考えられる。

土地の記録的機能を持つ碑は、その土地に根差した説明を施すことで戦争の記憶をわかりやすく後世へ伝えることを目的としたものである。この場合誰のために建立したのかという建立対象を特定することに重点は置かれない。このように対象が特定されないにも関わらず、あるものを残す行為が重要とされる理由を今井は「そのモノ自体に価値があるからである」（今井：2002）と述べている。つまりモノ自体が価値を持てば、碑が何を意図しているのか示さなくても、モノは残されるというのである。

またこのタイプの碑には、残された原爆遺構の説明が刻まれている場合が多かった。つまり、「原爆遺構」という価値を持つモノを残す取り組みとしてこの種の碑が存在しており、それが土地に根差した記録的機能を果たしているのである。この機能を持つ碑はそこに「存在する」ことにおいて意味を持つのである。

またすでに述べたように、ほとんどの銘板にその土地の被爆直後の写真が埋め込まれており、それ自身が被爆遺構や被爆写真とリンクされることで、被爆者や土地関係者に限定されることなく、広域の人々に歴史事象を伝達することができる。

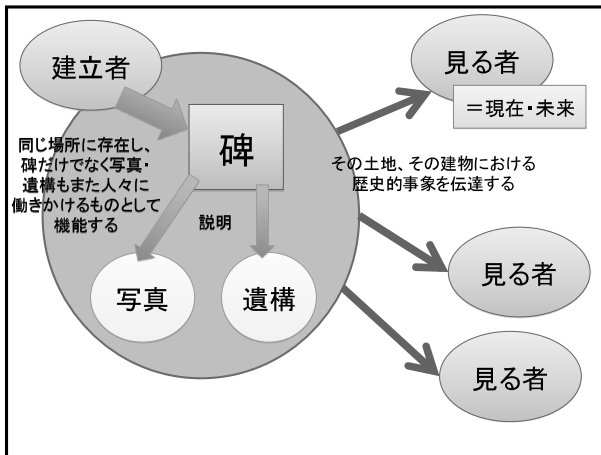


図3．土地の記録的機能を持つ碑と人々との関わり

を変えずに「残そう」という姿勢の結果であろう。

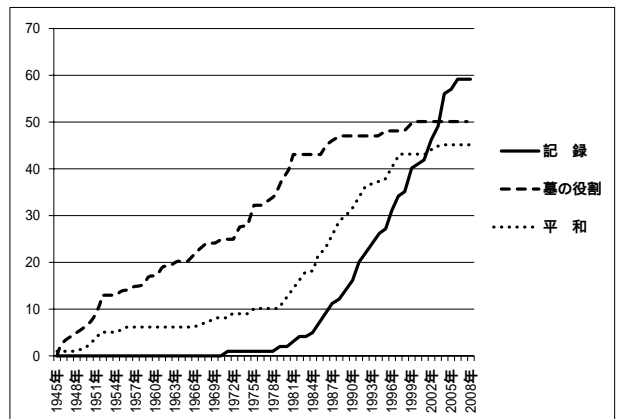
銘板はそれ自体が平和公園のような観光資源になっているわけではない。また、これほど多く存在するにもかかわらずその存在自体が注目されているわけでもない。そのため、碑に足を運ぶという人々の態度も消極的であると考えられる。これは平和メッセージ伝達機能をもつ碑が、存在感を消散し人々を惹きつけ、平和祈念という思いを強く発信していたことと、大きく異なる。

#### 4 - 4 . 三つの機能の建立状況

これら三つの機能を持つ碑の建立状況を分析し、合計建立数と年ごとの建立数を比較した結果をグラフに示す。

表3．機能別に見た碑の建立数

機能	建立数
墓的機能	51
土地の記録的機能	60
メッセージ伝達機能	44
遺構	25
その他	18



グラフ：機能別に見た碑の建立推移

土地の記録的機能が最も建立数が多いが、全体としてはそれほど大きな差はない。遺構はその土地に残っているものなので、この分類では三つの機能に含めてはいないが、性質としては土地

の記録的機能に含まれると考えられる。

これらの建立分布状況、そして建立推移を報告する。

地理的な建立分布状況に関しては、メッセージ伝達機能を持つ碑が爆心地に集中して建立されている一方で、墓的機能および記録伝達機能をもつ碑は広い範囲に分散して建立されている。メッセージ伝達機能はメッセージを発信するものとして、生きた人々それも長崎市民に限定されず日本そして世界という外部に向けられた碑であるため、建立場所に関しても外部の人々を意識したものとして爆心地付近が比較的多く選ばれる傾向が表れたと推測される。

次に建立状況の経年推移を見てみよう。墓的機能を持つ碑は1946年にすでに建立され始めている。建立状況は近年になるほど減ってきており、1980年代からはほとんど建立されず、1999年から現在までは頭打ちになっている。そのため、グラフの傾きが2008年に近づくほどゆるやかである。

メッセージ伝達機能を持つ碑も戦後比較的早い段階で建立されはじめたが、建立が本格化するのは1980～90年代にかけてのことである。記録的機能を持つ碑と同時期に建立が増加しており、長崎市において平和を祈る活動がこの時期盛んになったものと考えられる。その端的な表れは1977年に長崎市が提起した「世界平和シンボルゾーン計画」である。

記録的機能を持つ碑は戦後すぐには設置されておらず、30年近く経過した1971年に初めて建立され、1980年代から毎年建立されるようになり急速に数を伸ばしてきた。ピークを迎えたのは2000年以降であり、2004年には1年間で合計7基の碑が建立されている。この1、2年は建立されていないが、グラフの傾きは1980年代から急になり、近年まで変わらない。

これは1980年代から新たな土地の記録が再発見され、そのモノの価値が再認識される営みが積極的に行われるようになったためだと考えられる。こうした、これまでは注目されなかったモノに対する原爆の記憶が1980年代から想起され、記録されていくという営みは長崎市が中心となっており行われている。これは薄れゆく記録を後世に残していこうとする記憶の保存作業が近年盛んになっているということの意味しているのではないだろうか。

## 5 . 結論

本研究では長崎市内に建立された原爆関連の碑を対象に、長崎市における碑と人との関係性、そして原爆記憶のあり方とその継承方法の変化を追った。今回の調査では、現在の長崎市において碑が何らかの記憶を残すための伝達装置として様々な機能を果たしていることが明らかになった。碑を介して原爆記憶に意味を与え、継承していくにはその時代に合った方法を模索していく必要がある。その方法の変化を読み解くことで、人々が何を残すために碑を建立したのか明らかにすることができた。

被爆直後、焼け野原になった長崎で、自らと何らかの関係を持つ「具体的な死」に直面した人々は、その死を悼み、また死者の記憶をその場に残すために碑を建立した。これが本研究が指摘する墓的機能に相当するものであり、これによって生き残った人々は碑の前に行くことで亡き死者と向き合うことができた。これは固有の共同体が過去を振り返り、死者をしのぶために建立した



ものであるため、現在から過去へのベクトルが作用していると言える。

年月が経過し、具体的な死者との記憶が薄れていくにつれて、原爆の記憶を継承する方法は二つに枝分かれしてきた。一つは死者を「平和祈念」のシンボルと捉え、長崎だけではなく世界の「核廃絶」という問題に焦点を合わせていくことで原爆の記憶を継承する方法である。そこにある記憶、そして死者との関係は抽象的であるが、戦争を体験していない生者の記憶に「長崎の原爆」を刻むためには、碑文に現代の問題との結び付きを含めた表現方法を用いることで未来の世代へとつなげる必要があったと考えられる。

もう一つは、土地の記憶保存資料として、土地に関する記憶を継承する方法である。この方法は生者にも死者にも積極的に向けられない形で建立されたもので、碑と人々との関わりは他の機能をもつ碑に比べ少なく、その方法もアーカイブ的である。これは土地の記憶が忘れられることを防ぐための保存作業として建立されたものであり、存在した「ヒト」ではなく、存在した「モノ」に関する記憶を残そうとするものである。

被爆体験者の減少により、原爆の記憶を残す営みとしての碑の機能、そして人々が碑に託した思いが時代とともに変化していったことが、今回の調査結果から導き出された。犠牲者を含む特定の共同体つまり身内に限定して向けられていた記憶装置が外部の存在を意識したことで、向かう方向、そして機能を多様に変化させていった。これによって、記憶の抽象化が起こり「原爆による死者」を「平和の犠牲者」として捉え直し、その記憶を未来につなげることで核の惨事の再発を防ぐことに重点を置き、長崎の原爆記憶をヒトさらにはモノという二方面からとどめる行為に発展したのであろう。これは「現在から過去」という向きのベクトルが「現在から未来」という向きのベクトルへと変化したことを意味し、同時に碑が多様な意味付けへと開かれたことも意味する。

碑への意味付けは今後も様々な形で行われるであろうし、そのたびに新たな碑が誕生することもあるだろう。碑がどのような意図で建立され、どのような機能を持つかを見守ることで、原爆に対する人々の意識の変化を知ることができる。また原爆体験がどのように解釈、記録、また構築されるかを考える上で碑は貴重な資料となりうるであろう。

ただ溝口(2005)が述べるように、碑によって全ての記憶が表象されるわけではなく、そこには建立者の意図が含まれ、それ自体が偏った構築物であることを忘れてはならない。碑に注目するということは、解釈の仕方によっては偏った歴史の再生産につながる可能性がある。それゆえ、今を生きる私たちは過去の歴史について見直す作業を続け、様々な角度から過去と向きあい未来を築いていく必要があるのだ。

## 主要参考文献

- 阿部安成 1999年 『記憶のかたち：コメモレイションの文化史』 柏書房  
 今井信雄 2001年 「死と近代と記念行為：阪神・淡路大震災の『モニュメント』にみるリアリティ」『社会学評論』第204号、pp 412 - 429  
 王曉葵 2006年「中国の革命・戦争記念碑に関する基礎的調査：広州地域を中心に」『地域研究・国際学編紀要』34号、pp 245 - 263  
 スターケン、マリ 1996年 「壁、スクリーン、イメージ：ベトナム戦争記念碑」『思想』866号、pp 30 - 60  
 長崎市 1986年 『碑は訴える 被爆40周年記念』

- 長崎市原爆被爆対策調査課 「平成20年版 原爆被爆者対策事業概要」  
長崎市長崎国際文化会館 1975年 『原爆被災復元調査事業報告書』  
長崎平和推進協会 2005年 『長崎の原爆遺跡・慰霊碑ウォークマップ』  
松崎聖宣 2001年 「戦争記念碑についての一考察：愛知県幡豆郡西尾地区に則して」『歴史研究』47号、pp 51  
- 79  
本康宏史 2006年 「慰霊碑研究の現状と課題」『東アジア近代史』9号、pp 70 - 87  
若尾祐司・羽賀祥二（編） 2005年 『記憶と記憶の比較文化史』名古屋大学出版会  
米山リサ 2005年 『広島：記憶のポリテクス』岩波書店  
和田光弘 2005年 「記念碑の創るアメリカ：最初の植民地・独立革命・南部」若尾祐司・羽賀祥二（編）『記憶と記憶の比較文化史』名古屋大学出版会、pp .114 - 164